

指標名: 国際収支(2012年11月)

発表日2013年1月11日(金)

~経常収支は原数値では赤字転落も、季調値では黒字を維持~

 第一生命経済研究所 経済調査部
 担当 エコノミスト 大塚 崇広
 TEL : 03-5221-4525

		原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			所得収支	
					貿易収支	サービス収支		
2011	5月	5,744	3,525	▲ 7,517	▲ 6,314	▲ 1,203	11,945	
	6月	5,389	9,590	▲ 1,107	35	▲ 1,142	11,670	
	7月	10,537	8,237	▲ 2,263	▲ 582	▲ 1,681	11,385	
	8月	4,363	6,971	▲ 4,008	▲ 2,059	▲ 1,949	11,808	
	9月	16,107	10,255	▲ 1,210	227	▲ 1,438	12,250	
	10月	5,339	4,703	▲ 7,409	▲ 5,363	▲ 2,046	12,717	
	11月	1,261	5,123	▲ 5,920	▲ 4,047	▲ 1,873	12,193	
	12月	2,657	6,991	▲ 4,271	▲ 2,441	▲ 1,829	12,367	
	2012	1月	▲ 4,556	1,209	▲ 7,914	▲ 7,056	▲ 858	10,476
		2月	12,026	8,757	▲ 2,421	▲ 496	▲ 1,925	11,605
		3月	13,074	4,879	▲ 4,991	▲ 3,775	▲ 1,216	10,815
		4月	3,735	3,486	▲ 7,904	▲ 5,287	▲ 2,616	12,263
5月		3,421	4,049	▲ 6,510	▲ 4,066	▲ 2,444	11,851	
6月		4,221	7,611	▲ 3,777	▲ 1,666	▲ 2,110	12,176	
7月		6,625	3,779	▲ 7,352	▲ 4,794	▲ 2,558	12,023	
8月		4,448	7,062	▲ 5,006	▲ 2,539	▲ 2,467	12,813	
9月		5,137	▲ 1,335	▲ 12,776	▲ 9,810	▲ 2,966	12,216	
10月		3,769	4,141	▲ 7,939	▲ 5,570	▲ 2,370	12,783	
11月		▲ 2,224	2,259	▲ 8,725	▲ 6,169	▲ 2,556	11,846	

(出所)財務省「国際収支統計」

○ 経常収支は原数値で10ヶ月ぶりの赤字も、季節調整値では黒字を維持

11月の経常収支は原数値で2,224億円の赤字と、コンセンサス(▲576億円、レンジ:▲2,828億円～+1,005億円)を下回る弱い結果であった。原数値では2012年1月以来の赤字であるが、季節的な要因が大きく、季節調整値では2,259億円の黒字と基調に変化はなかった。黒字額は引き続き低水準であり、貿易収支の大幅な赤字が経常黒字全体の水準を押し下げている。

大幅な貿易赤字が続いている要因は①原発の停止に伴い燃料輸入が高水準となっていること、②海外経済の低迷等を背景に輸出が悪化傾向にあることである。ただし、輸出については海外経済の回復に伴って徐々に回復に向かうとみている。11月の輸出金額は3ヶ月ぶりに小幅ながらも前月比プラスになったことに加え、本日発表の通関統計の12月上中旬速報の伸びが続き、12月の輸出が前年比▲4.4%になるとすれば、12月の輸出金額も前月比プラスになるとみられ、輸出の悪化に歯止めがかかってきた可能性が高い。先行きの輸出の回復は緩慢なものと思定されるため貿易収支の赤字は当面続く公算が大きい。貿易赤字の一段の拡大によって経常収支が赤字基調に転落する可能性は低いであろう。

○ 貿易外収支の動向: 所得収支の黒字は前月から縮小も高水準を維持

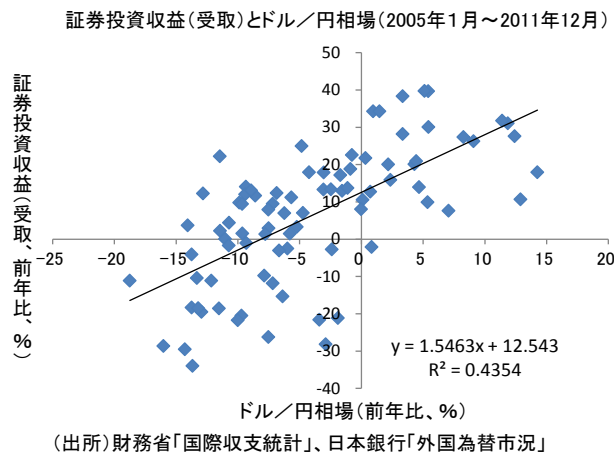
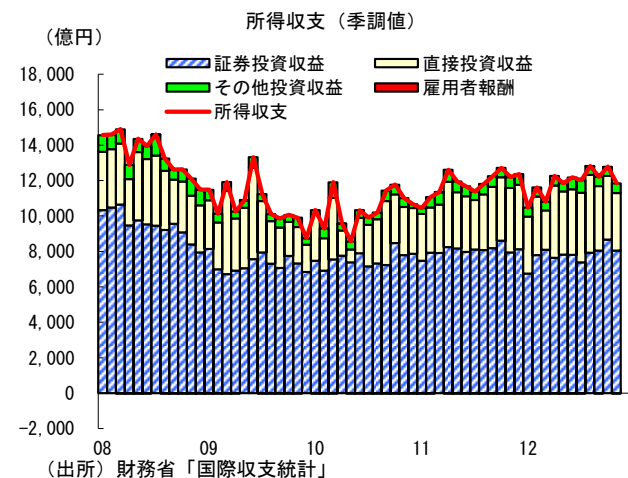
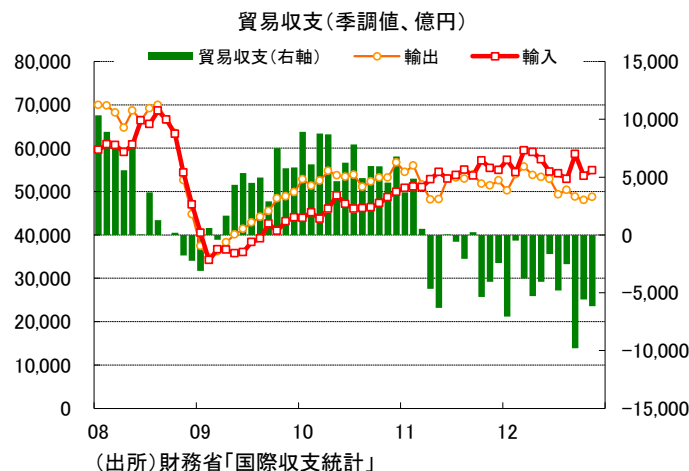
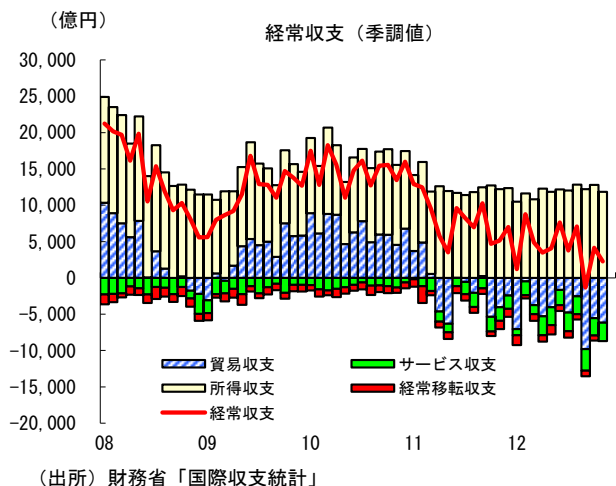
貿易外収支の内訳を季節調整値で確認すると、サービス収支は2,556億円の赤字と前月(▲2,370億円)から

赤字幅が縮小した。サービス収支は、その他サービス収支が海外経済の減速等を背景に赤字傾向にあることなどから赤字幅が拡大してきた。しかし、先行きは海外経済の回復に伴い受取額は下げ止まりに向かうとみており、サービス収支の赤字拡大も歯止めがかかってくる可能性が高いだろう。

一方、所得収支をみると、11月は11,846億円の黒字と前月（12,783億円）から黒字幅が縮小したものの、引き続き高水準の黒字を維持した。受取の内訳をみると、証券投資収益は横ばい圏で推移しているのに対し、これまで拡大基調を保っていた直接投資収益はやや頭打ちとなっている。ただし、先行きは海外経済の回復を背景に直接投資収益は徐々に拡大基調に戻る可能性が高いと考えている。

○ 先行きも経常収支（季節調整値）は低水準ながらも黒字基調を維持する見込み

このように経常収支は原数値では赤字に転落したものの、季節調整値では黒字を維持した。先行きも、これまでと同様に貿易収支の赤字を高水準の所得収支の黒字が補う構図が続くことで、経常収支は黒字基調を維持するであろう。貿易収支については、輸出が海外経済の回復に伴って徐々に持ち直すとみられることから、赤字幅は縮小に向かう見込みだ。ただし、海外経済の回復は緩慢なものと予想されるため、赤字縮小のペースは緩やかなものにとどまろう。他方、所得収支は、豊富な対外純資産を背景に引き続き高水準の黒字を維持する可能性が高い。足元の円安も所得収支の黒字の押し上げ要因だ。特に所得収支のうち証券投資収益（受取）は為替相場との連動性が比較的高く、円安基調が続けば所得収支の押し上げに寄与する可能性が高い。足元やや頭打ち感のある直接投資収益も海外経済の持ち直しに伴って拡大基調に戻る公算が大きい。総じてみれば、経常収支は低水準ながらも黒字基調を維持する見込みだ。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。